

書評に答えて

池田 昭

初めに、書評者、津城寛文氏の御苦勞に感謝の意を表したい。

書評してもらった『大本史料集成』Ⅰ、Ⅱ、Ⅲは、大本教（敗戦までのもの）の根幹と思われる資料と解題ならびに解説から成り立っている。前者は、思想、運動、事件に即した龐大な資料、後者は、資料の位置づけ・意味づけならびに宗教思想運動論である。こうした資料と大本論を通読し、書評してくれた勞をねぎらいたい。

けれども、書評からは、啓発され、学問の発展に資する見解が、肯定的にも否定的にも示されず、それどころか、学問的操作の基礎知識の所有さえ疑わしめる主張がみられ、今日の学問的混迷を垣間見ることが出来る。ここで、とくに「書評学」を述べようとするのではないが、資料と大本論にかんする基本に即し、書評者の主張にふれてみたい。

資料について

Ⅰ. 蒐集と所収の視点

現在の資料であれ、過去の資料であれ、これらの資料は、あるいは、研究者の蒐集・所収能力の乏しいことからすると、無限に存在していると考えられ得るし、あるいは、資料自体の物理的、社会的制約による限界からすると、有限にのみ存在していると考えられ得る。そうすると、双方のことから、我々が蒐集・所収し得る資料には限界がつきまとう。

書評者は、後者に余りふれることなく、前者を主にとりあげているので、ここでは、さしあたって、主に前者について考えてみよう。（ここで、さしあたって、という意味は、教団、権力双方の資料には、蒐集にさいし種々な困難をともない、また、公開のための所収にもそうであって、学問的操作のうえで顧慮

しなければならない問題が存在するが、ここでは觸れないという意味である）。

いま述べたように、無限と考えられる資料から、選択された資料は、限界をもつと云っても、それが無原則であってはならない。この意味はこうである。

研究者の資料蒐集の意図ないしは目的が設定される場合（明示されようと、されまいと）、一定の価値判断がともない、これに基づいて選択された資料には限界が生ずる。この限界は止むを得ないのであって、この限界を超えようとするは無理で、研究者はこの事態の前に禁欲し、甘受せねばならない。

この限界は、他の意図ないしは目的をもつ研究者からすると、たとえば、書評者には、「氷山の一角」と映じ、あるいは「多少の不便」と感じ、不満足ならざるを得ない。書評者が、そう思い、かつ感ずるのも止むを得ないのである。

かような限界ではなく、資料の物理的、社会的制約による限界まで、次のように不満が書評者によって述べられる。研究者によって資料として多く期待出来る『大本七十年史』の「あとがき」に「未知・未開拓の部分も多い」と記述されていることについて、（少し長いが書評者の資料観を率直に表わしているので引用する）「未知・未開拓の分野ということからは、そもそも資料を蒐集する視点が未だない、つまりどんな資料をどんな目的で探せばいいかわからないということなのである。したがってこのレベルで『七十年史』用の資料の蒐集者と関心分野を異にするものは、全く新たな資料蒐集を第一歩から行なわなければならないのである」と。この文章には、論理的に理解し難いものがあるだけでは

なく、「ないものねだり」は、止めて欲しいという感想を懐かせるものがある。

これらの限界は、研究者が甘受せねばならないのであるが、限界のある選ばれた資料は、意図ないしは目的に対し目的合理的に整合性をもっているものでなければならない。筆者にとって、この整合性は重視される。筆者の意図ないしは目的は、一つは、大本事件の真相、すなわち権力の大本像と大本の実像の解明、一つは、これらの資料の公開とこれらに基づく共同討議である。これらの意図ないしは目的に沿うて、権力と大本双方の資料を蒐集し、所収（すなわち公開）がなされた。この場合、重要なことは、この「沿うて」ということである。

この大前提となるものは、価値判断をいれてはならないことである。云い換えると、書評者の云う「発想・視点」は考慮されてはならないのである。というのは、資料の選択は目的合理的でなければならないから。こうした書評の基礎知識は、心得て置く必要がある。

さて、書評者の批判は、次の二点に大凡絞ることが出来るように思われる。

一つは、筆者が出口王仁三郎について「正面からの取り組みが放棄されている」という。この理由は、筆者が「全文献の総括が困難」、「通読不可能」と述べているからであるという。

いま少し、筆者の「全文献の総括が困難」というくだりを述べると、王仁三郎の文献は、量的にみて膨大、質的にみて表現形式も多様（たとえば、小説、評論、韻文など）、表現内容も多義性を帯び（たとえば、純粋に宗教の領域にのみ限定されることなく、政治、経済、芸術などの領域にもわたっている）、したがって、「表現形式もしくは内容にしたがって、彼の全文献を総括してみることは、困難である」と。

つまり、王仁三郎の文献の性格について量的・質的特徴から「表現形式もしくは内容」によると、「全文献の総括が困難である」と述べたまでのことで、無限定に述べたのではない。具体的には、時代順（明治、大正、昭

和）に夫々の主要機関誌などに発表した論文の主要なものは所収した。

さらに、筆者は、『霊界物語』について「通読不可能」と述べ、ただ「宇宙の理法」「神話」「神と人間との関係」のみを所収した。

たしかに、この『物語』は、八十一巻（冊教は八十三冊）で、第一次大本事件後では教典とされたが、しかし、幹部の上申書に示されるように「伝奇小説的な物語の中に一種の宗教的雰囲気のあることを感じ此の物語を読んで此の雰囲気に親しむ事がやがて信仰向上の上に必要なのであらう……」（傍点筆者）と「気分的」レベルで、教典が受けとられていた。筆者が資料蒐集中に、何度も多くの信者から『霊界物語』を読むように云われたが、そのさい筆者がどこに要点が在るのか、かいつまんで教示してくれるように頼んだが、それには答えがなかった。さらに、ここで筆にすることをほばかる感想を聞いたこともある。つまり、『霊界物語』は、教典と呼び得るような、教えを体系的にまとめているものではなく、したがって「実感」レベルで感得されるものであって、信者共通に理解し合えるものではない。

このような教典を読むということは、運動体としての大本教を考慮するうえで、無駄であると思えた。この意味で、一部を読んだが、所収を大部分断念した。

いま一つは、社会政治運動に直接反映しない要素、饑礼（鎮魂帰神）があまりとりあげられていないという。

筆者は、大本教を宗教思想運動として捉え、思想も饑礼も組織も重視している。けれども、これらを扱う場合、それぞれの占める運動体における役割の程度を考慮せねばならない。『大本七十年史』の当時の入信者の調査によると、「立替え」思想に基づくものが「相当ある」と云われている。そうすると、饑礼は、それほど顧慮されなくてもよい。けれども、資料としてはその性格が明示されねばならない。事項索引の項目では、書評者の関心のある鎮魂関係は、九十六もあり、書評者の問題とすること（偶然にも書評と同じ年

報Ⅳに載っている)以上の内容が収められている。

ロ. 資料価値

所収された資料がいかなる内容のものなのか、これは、自然科学の実験・観察の結果と同様に重要である。だが、最近の学界には、研究者の小説家まがいの主観的想像(思いつき?)説が横行しているせいか、資料内容については「貴重な未公開資料を少なからず含みつつまとめられている」と評しただけで、これまでに明らかにされた資料と相違する重要な資料の指摘が全くない。こうした指摘をする知識がなく、すでに述べたように、ただ書評者の個人的関心の側面から「資料蒐集段階での偏りは、読者の批判を免れえないものと思う」と述べることは、非学問的批評としか思えない。

ただ一例のみを述べてみよう。大本教が明治初期の千年王国運動の教少ないものの一つであることは、周知のことである。そうすると、大本教では国家権力とどう対峙していたか、とりわけ天皇への態度はどうであったか、重要である。(弾圧事件を問題にするかどうかとは関係なく)。このことを顧慮する前提として次のことが配慮されねばならない。これまで、出口なおの云う「てんし」(多くは伏字)が、村上重良氏の『大本神諭』(天の巻、東洋文庫、平凡社)では、「天使」と解釈されているが、筆者の今回の一連の資料では「天皇」と解釈され得るのである。このことは、重要な検討事項で、文献を読むうえで地味で、大切な学問的操作なのである。

解説について

解説のとおりあげ方も、学問の基礎的操作をふまえずに、個人的恣意によっており、筆者のこの資料集に寄せた「共同討議」から程遠い。紙数の制約から二、三の問題点を指摘してみたい。

科学である限り、理解もしくは解釈が事実

に即しているかどうか、重要で、村上重良・安丸良夫氏らの「権力=悪玉 v s 大本=善玉」、あるいは新旧の視点から、離れているか、あるいは新説かどうかは、問題とはならない。書評者は、まず科学の基本に立ち帰るべきである。

次に、ある既成の説明原理が事実と妥当するかどうか、これまた重要なことである。たとえば、新宗教は平等の原理をもっている、大本教は平和に志向していた、という意見があるが、果たしてそうなのか。筆者は、これらの点について異った意見を展開しているが、書評者はふれていない。

こうした問題のなかで、とくに注意すべきことには、問題の核心と考えられるもの、たとえば大本教のなかに「国体変革」の思想があったかどうか、このことについて筆者は、指導者に天皇になる意志、あるいは信者らがそうみていた見解などの存在を、これまでの既成の学説とは相違して主張をしている。書評者は何らふれていない。

最後に、書評者は、書評の文献を熟読し、少なくとも誤解してはならない。「同心円の拡大論理」「型の大本」などという、社会学あるいは大本の概念についてシャマニズムの発想などと述べたことはない。

さらに、宗教現象の学問的理解をしたうえで書評してもらいたいが、書評者は、「神懸り」による思想と「神懸り」する人の思想とを区別しようとしているが、客観的に本当にそのように考えているとするならば、何をか云わんやである。というのは、かかる区別をする人は教団には多いからである。

今日、学界発表で「びっくりする発表」を見聞するが、たとえば村落調査の結論は、「絵」(発表者の書いた絵画)に示されていると云われたが、少なくともこうした研究のないように願って、書評への批評をした次第である。